



宮脇教室4限目

一人称小説はこう訳せ！

必要なのは、素顔を見せない“演技力”

「小説はこう訳せ！」、「小説はこう“創れ”」、「基本にかえれ」と続いてきた宮脇教室もいよいよ4限目になりました。今回は、一人称小説の扱い方についての極意を伝授していただきます。

小説の翻訳の基本であり、なおかつ一番難しいのが一人称小説の翻訳です。語り手のキャラクターを正確につかみ、それを生かした訳し方をする必要があります。翻訳者は、いわば語り手の仮面をかぶり、「演技」をすることになるわけですが、その際に気をつけなければならないのは、うっかり素顔を見せないようにする「演技力」です。本講座では、それを支えるための日本語力の養い方を、具体例を参考にしながら探っていきます。

課題文のOrange and Golden は、ある実話から着想を得て書かれた犬と飼い主の話です。どうぞ挑戦してみてください。今回の講座も申し込み順の80人の受け付けとなります。お早めのお申し込みをお待ちしています。

◆ 参加要項 ◆

日 時

2015年6月6日（土）15：00～17：00（受付開始14：30）

講 師

宮脇孝雄 氏（翻訳家／随筆家）

会 場

日本出版クラブ会館・セミナールーム
（新宿区袋町6番地 都営大江戸線牛込神楽坂駅より徒歩2分）
<http://www.shuppan-club.jp/>

参加費

講座 2,100円

定 員

80名（申込順、定員になり次第締切らせていただきます）
「洋書の森」未会員の皆さまもご参加になれます
希望者による恒例の交流会（参加費3200円・食事を含む）を講師同席のもと17：30より、
会場1Fレストラン・ローズルームにて開催いたします
参加ご希望の方は同時にお申込みください

お申込み・お問合せ

お名前・洋書の森会員番号（会員の方）・ご連絡先電話番号、アドレス・参加人数を明記して「6/6（講座のみ or 講座・交流会とも）参加希望」と以下アドレス宛てにE-mailにて送信してください

（財）日本出版クラブ内 「洋書の森」事務局
E-Mail：yousho@shuppan-club.jp TEL 03(3260)5271

◆講義内容◆

一人称の小説の訳し方について改めて考えてみたいと思います。まず、F・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』の冒頭部分を、今出ている複数の訳で読み比べて（変なところがあればもっといい訳方を考えて）みんなで楽しもう、というところから始めます（原文と訳文は当日配布します）。訳語を少し変えるだけで、印象ががらりと変わるのがわかるとと思います。

そのあと、みなさんに提出していただいた課題文の翻訳を見ながら、拙訳と読み比べつつ、感想、提案、翻訳のヒント、その他を並べていきます。

入梅のみぎり、土曜の午後をお楽しみいただければさいわいです。

訳文の添削を希望される方は、5月29日(金)15:00までに「洋書の森」事務局へ届くようにメールでお送りください。いつものように添削答案は氏名を消し、疑問の残る箇所には傍点を引いて当日の講義時間に配布いたします。「たいへんよくできました」を目指してがんばってください。

◆講師略歴◆

宮脇孝雄（みやわき たかお）

1954年2月14日、高知県土佐市生まれ。高知県は東京都より面積が広いが、人口は杉並区より少なく、しかもその八割が高知市に集中しているため、県庁所在地を少し離れると一キロ四方自分以外誰もいないという場所がよくあり、少年時代から人間ではなく昆虫や鳥や魚と戯れることを好んだ。実家の右隣はお菓子屋、左隣は本屋で、字が読めるようになるとお菓子を食べながら本を読む生活を満喫するようになる。実家は映画館経営で、本を読んでいないときは映画館に入り浸る小学生だった。大学時代に参加した推理小説サークル（ワセダミステリクラブ、略称WMC）の先輩、大井良純氏（翻訳家、故人）に小鷹信光氏と菅野罔彦氏（早川書房編集者のちに編集長、故人）を紹介していただいて、この道に入る。もともとはSFファンだったが、WMCで折原一氏（のちの作家）から古本屋巡りの手ほどきを受けたり、入れ違いに卒業したM氏（のちの作家、北村薫氏）が部室に残していったエラリー・クイーンや鮎川哲也を読むうちにミステリに目覚める。大学二年のとき「ミステリマガジン」に短篇を訳したときにもらったのが最初の原稿料、その四年後に単行本（早川ポケミス、ジョイス・ポーター著『殺人つきパック旅行』）を出してもらったときに振り込まれたのが最初の印税。以後、四十年ほど売文生活を送る。

主な著書

『書斎の旅人－イギリス・ミステリ歴史散歩』（1991年）早川書房、『書斎の料理人－翻訳家はキッチンで…』（1991年）世界文化社、「『煮たり焼いたり炒めたり』早川文庫、『翻訳家の書斎－〈想像力〉が働く仕事場』（1997年）研究社、『ペーパーバック探訪－英米文化のエッセンス』（1998年）アルク、『翻訳の基本－原文どおりに日本語に』（2000年）研究社、『続・翻訳の基本』（2010年）研究社、『英和翻訳基本辞典』（2013年）研究社。

主な訳書

トーマス・トンプスン 『血と金 ある富豪の愛と執念』 小鷹信光共訳、パシフィカ、1977年、ジョイス・ポーター 『殺人つきパック旅行』 早川書房、1978年、リチャード・スターク 『悪党パーカー 殺戮の月』 早川書房、1979年、コリン・ウィルコックス、ビル・プロンジーニ 『依頼人は三度襲われる』 文藝春秋〈文春文庫〉、1979年、リチャード・エイヴァリー 『タンタロスの輪 コンコラッド 消耗部隊』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1980年、ウィルコックス 『容疑者は雨に消える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、ウィルコックス 『女友達は影に怯える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、テランス・ディックス 『盗まれた名画をさがせ』 ティビーエス・ブリタニカ（ペーカー街少年探偵団）、1981年、M. S.

バリー 『サイモンと魔女』 ティビーエス・ブリタニカ、1981年、グレゴリー・ベンフォード、ゴードン・エクランド 『もし星が神ならば』 早川書房 のち文庫、1981年、ウィリアム・ディール 『シャーキーズ・マシーン』 角川書店、1982年、テリー・カー 『聖堂都市サーク』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1984年、ジェームズ・マクルーア 『小さな警官』 早川書房、1984年、アーサー・ライアンズ 『ハード・トレード』 河出書房新社 のち文庫、1985年、W・ケリー、E・W・ウォーレス 『目撃者 刑事ジョン・ブック』 角川書店〈角川文庫〉、1985年、クライヴ・バーカー 『ミッドナイト・ミートトレイン』 集英社〈集英社文庫〉、1987年、ジョン・コーンウェル 『地に戻る者ーイギリス田園殺人事件』 早川書房、1988年、フリーマントル 『名門ホテル乗っ取り工作』 新潮社〈新潮文庫〉、1989年、パトリック・マグラア 『血のささやき、水のつぶやき』 河出書房新社、1989年、ジェーン・デンティンガー 『そして殺人の幕が上がる』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1991年、ヨゼフ・シュクヴォレツキー 『ノックス師に捧げる10の犯罪』 宮脇裕子共訳、早川書房、1991年、ディーン・R・クーンツ 『ストレンジアーズ』 文藝春秋〈文春文庫〉、1991年、デンティンガー 『誰も批評家を愛せない』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1992年、パトリシア・ハイスミス 『女嫌いのための小品集』 河出書房新社〈河出文庫〉、1993年、イアン・マキューアン 『イノセント』 早川書房 のち文庫、1993年、ジェフ・ニコルスン 『食物連鎖』 早川書房、1995年、ジョン・ダニング 『死の蔵書』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1996年、C・W・ニコル 『スケッチの音』 エム・ピー・シー、1999年、メアリー・M. モーリス 『逃避行』 集英社〈集英社文庫〉、1999年、ウィリアム・J. パーマー 『文豪ディケンズと倒錯の館』 新潮社〈新潮文庫〉、2001年、ドロシー・L・セイヤーズ 『顔のない男ーピーター卿の事件簿〈2〉』 東京創元社〈創元推理文庫〉、2001年、グラディス・ミッチェル 『ソルトマーシュの殺人』 国書刊行会、2002年、ハイスミス 『回転する世界の静止点ー初期短篇集1938-1949』 河出書房新社、2005年、ハイスミス 『目には見えない何かー中後期短篇集1952-1982』 河出書房新社、2005年、マシュー・ニール 『英国紳士、エデンへ行く』 早川書房、2007年、最新刊は『ジーン・ウルフの記念日の本』（2015年5月、国書刊行会刊）。